大使コラム（2012 年 4 月）

４月、リスボンではテージョ川に陽光の輝く日々の合間に、待ち望まれていた雨の日も時々ある不安定な気候が続いています。本格的な春まであと少しといったところでしょうか。

先月は、東日本大震災の一周年に際し、世界各地の日本大使館や総領事館で、追悼と復興のための記念行事を開催しました。震災の犠牲者のご冥福を祈り、この一年間の日本の努力と現状を海外に広報し、また各国から受けた多くの支援に改めて感謝するためのものです。

当大使館でも、リスボン市の中心にあるフォス宮殿において、追悼の式典と震災の状況を伝える写真などの展示会を開きました。また、ポルトガル政府（防災庁）と共催で「地震・津波：日本とポルトガルの経験」をテーマに、日本の専門家も参加した防災セミナーをあわせ開催しました。多くの方々にご参加頂き、改めて御礼申し上げます。

１７５５年にはリスボンでも、当時欧州を震撼せしめた地震と津波の大災害が発生しており、震災問題には当国の人々も強い関心を寄せています。右セミナー以外にも、当国のマスコミや地方自治体などがこの機会に、東日本大震災に関連する特集記事やシンポジウムを多数行いました。大使館でも、記事の取材や討論会などにいろいろな形で協力したところです。さらに、当国の「葡日友好協会」も、改めて日本を支援する記念行事を震災一周年に合わせて、カスカイス市で開催してくださいました。

また、当地の在留邦人の方が、福島県の相馬市および南相馬市から被災者の中学生２４名を３月末から約１週間、当地に招待するという行事も行われています。異国での体験が苦しい経験をした若い人々の励みになればと、多くの方々や企業などもこの企画に協力してくれたそうです。大使館でも、震災直後に日本を励ます絵を沢山届けてくれた当地の学校や、震災の時ちょうど日本を訪問中だった学校の生徒さん達と彼らとの交流会を実施しました。カバコシルバ大統領やコスタ・リスボン市長への訪問などにもお手伝いさせて頂きました。このポルトガルでの様々な経験は、必ず彼らの将来に役に立つことと信じます。

先月は、ポルトガルのアソーレス諸島を訪問しました。リスボンから西に飛行機で約２時間、約１５００キロの大西洋上にあるこの９個の島々は、マデイラ諸島と並んでポルトガルの自治州です。今回は州政府のあるサン・ミゲル島、州議会のあるファイアル島および大統領の代理人がおり、また米空軍が駐留する空軍基地のあるテルセイラ島の３島を駆け足で訪問し、それぞれ代表の方々と会見して来ました。

日本ではあまり知られていませんが、州知事によれば昨年も日本人は３００人ほど訪れてたとのことです。在留邦人も３名の方が、在留届けを出しておられます。
島の様子は、降水量が多く緑豊かで、火山島のため至る処に噴火口の跡やカルデラ湖、温泉などがあり、独特の景観を見せています。ファイヤル島から眼前に眺めた隣の島のピコ山は、当国の最高峰２３５１Ｍの火山で、富士山をさらにそびえ立たせたような風景でした。また、１９５７年に噴火したサン・ミゲル島のカペリーニョ火山は、世界の火山研究の面でも貴重な存在のようです。
テルセイラ島のアングラ・デュ・エロイスム市の町並みやピコ島のブドウ畑は世界遺産に登録されています。今回訪れた３島だけでも島ごとに、例えば畑の作り方が違い、ポルトガル語の方言も９島それぞれに異なるそうです。かつてこの島の経済を支えた捕鯨の博物館や、生産量が減少しつつあるアソーレスのワインの資料館も興味深いものでした。
日本からは遠い所ですが、州知事や州議会議長が希望していたように、日本の観光客にもアソーレス諸島の魅力を知ってもらえればと思います。

リスボンの観光フェアが今年も、先月開催されました。本年は、日本の観光関係の企業に加えて、当国と姉妹都市関係にある日本の自治体のご協力も頂き、日本各地の魅力も紹介させて頂きました。大震災のあと、日本では観光業も大きな打撃を受けていることに鑑み、今年は食文化の面も含めて、さらに情報の提供に努めました。多くのポルトガルの方々が日本ブースにお見えになったのも、日本の多くの企業や自治体などのご協力のお陰と深く感謝しています。今後とも、関係者の方々と協力しつつ、当館として工夫に努めて行きたいと考えます。

季節の変わり目に当たり、皆様にはご自愛のほどをお祈り申し上げます。